

科学研究費助成事業（基盤研究（S））公表用資料  
〔平成28年度研究進捗評価用〕

平成25年度採択分  
平成28年3月10日現在

「肥沃な三日月弧」の外側：遊牧西アジアの形成史に関する先史考古学的研究  
Beyond the Fertile Crescent: Tracing the Formation Process  
of the Nomadic Near East

課題番号：25220402  
藤井 純夫 (FUJII SUMIO)  
金沢大学・歴史言語文化学系・教授



研究の概要

従来の西アジア考古学は、「肥沃な三日月弧」内側の都市・農村社会に傾注してきた。しかし、その外側には広大な遊牧世界が展開している。本研究は、新石器時代から前期青銅器時代までの約5千年間を視野に入れた、複数国に跨る、テントで移動しながらの包括的調査によって、遊牧西アジアの形成史を追跡すると同時に、中東理解の歴史的枠組みの拡充・刷新を目指す。

研究分野：考古学

キーワード：ヨルダン、サウジアラビア、新石器時代、前期青銅器時代、遊牧文化

1. 研究開始当初の背景

従来の西アジア考古学は、「テル=遺丘」の考古学であった。従ってそれは、都市・農村の考古学、すなわち「肥沃な三日月弧」内側の考古学であった。当然のことながら、そこには周辺遊牧社会の動向は組み込まれていない。その弊害が、狩猟採集→農耕牧畜→都市文明という一線的な西アジア史の記述である。西アジア考古学がこれまで凡例の置き場としてきた内陸遊牧世界に踏み込み、西アジア史の全体性を回復しなければならない。それはまた、古代文明と地政学的イスラームに二局分化した我々の脆弱な中東理解を根本から鍛え直す作業でもある。

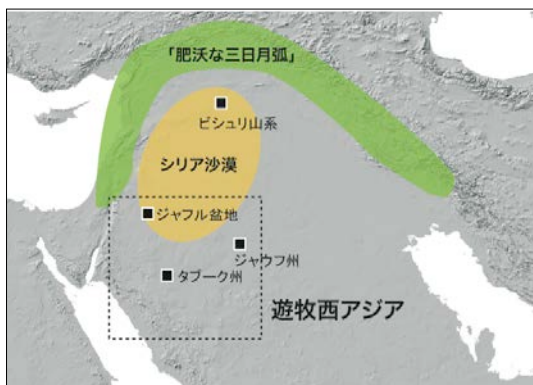


図1 「肥沃な三日月弧」の外側

2. 研究の目的

本研究の目的は、「肥沃な三日月弧 / Fertile crescent」の外側、すなわち遊牧西アジアの形成史を、広域遺跡調査を通して明らかにすることにある。具体的には、課題①

「肥沃な三日月弧」からの転身：短距離移牧の派生過程、課題②「肥沃な三日月弧」からの離脱：初期遊牧の成立過程、課題③「肥沃な三日月弧」からの自立：部族制遊牧社会の形成過程、の解明である。遊牧西アジアの形成史を通して、西アジア文明の持つ本来の奥行きを測距し直し、都市・農村世界に偏った従来の西アジア考古学を根底から刷新したい。

3. 研究の方法

遊牧西アジアの形成史を解明するには、従来型の調査、すなわち特定遺跡の継続調査では不十分である。数千年間の動向を見据えた、複数国に跨る、テントで移動しながらの、包括的広域遺跡調査が必要となる。それを、ヨルダン南部のジャバル盆地と、サウジアラビア北西部のタブーク・ジャウフ平原で実施する（図1）。

4. これまでの成果

課題①では、移牧出先集落の確認以上に、その母村問題が重要な鍵となる。なぜなら、母村との関係が判明して初めて本当の意味での出先集落と言えるからである。この難問への突破口が、ジャバル・ジュハイラ第3層集落の発掘で得られた。発掘区の岩陰に組み込まれたベイダ型の「pier house（棧橋型矩形遺構）」が、それである（図2）。定住域の建築様式と乾燥域の岩陰利用が合体融合したこの特殊遺構の発見によって、ジャバル盆地の新石器時代移牧民が西方定住集落から派生したことを実証することができた。また、第3層集落に付帯するダム・シスターンの層

位的観察、および C-14 年代測定によって、ジャフル盆地水利施設群の年代問題 にも最終結論が得られた。一方、ワディ・シャルマ 1 号遺跡では、サウジアラビア初の先土器新石器文化 B 集落の全体像を明らかにした (図 3)。



図2 ジャバル・ジュハイラ



図3 ワディ・シャルマ1号遺跡

課題②に関しては、ハシュム・アルファ遺跡の堅穴住居、ジャバル・ジュハイラ遺跡第2層集落の単純岩陰住居、ジャフル東部地区の貯水槽型ダムなどの調査を実施し、(出先集落を放棄して遊動性を高めたために)遺跡としての把握が難しいと言われてきた初期遊牧民の具体的足跡を捉えた。

課題③では、トール・グワイール1~3号遺跡(ヨルダン)、ワディ・グバイ遺跡群(サウジアラビア)、ウンム・グルナイン遺跡群(同左)における墓域調査によって、アラビア半島を中核とする前期青銅器時代円塔墓文化(Tower tomb culture)の実態を解明すると同時に、同文化のヨルダン方面への逆流過程を捉えた(図4、5)。これには、二つの意義がある。第一は、レヴァント起点の一線的な理解に陥りがちな遊牧化の過程を、南北に錯綜する複雑な系として初めて具体的に捉えたことである。第二は、大規模墓域を形成するこの円塔墓文化の拡散過程が、本格的な部族制遊牧社会の形成過程ともリンクしている可能性を示したこと、である。



図4 ヨルダンの円塔墓



図5 サウジの円塔墓

一連の調査成果は、三つの点で大きなインパクトを生みつつある。第一は、正しく遊牧民遺跡の調査データであること。第二は、ヨルダン・サウジ国境を跨ぐ広域調査データであること。第三は、家畜化から部族制遊牧社会成立までの約

5千年間にわたる、編年的にほぼ隙間の無いデータセットであること、である。これらはいずれも遊牧化過程の研究にとっては必須の要件であり、当然の前提とも言えるが、そ

れを断固実行した点に本研究計画の意義がある。

#### 5. 今後の計画

リサーチ・プロフェッサー1名(研究代表者)とプロジェクト特任助教1名(研究協力者)の科研専従組織をフル回転させることによって年4回の調査体制を維持し、ヨルダン・サウジの両国で、三つの課題すべてに必要十分な調査データを集積する。また、これに基づく調査報告・研究論文・学会発表を加速する。なお、今後2年間の調査対象としては、ワディ・ブルマ西遺跡群(ヨルダン)、ワディ・グバイ遺跡群(サウジアラビア)などを予定している。

#### 6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

・Fujii, S. (2016) Wadi Ghubai and Wadi Mohorak Sites: Protohistoric burial fields in the Tabuk Province, northwestern Arabia. In: M. Luciani (ed.), *The Archaeology of North Arabia: Oases and Landscapes*, pp. 111-131. Vienna: Austrian Academy of Sciences.

・Fujii, S. (2015) Rescue excavations at Jabal Juhayra, a stratified Neolithic settlement in the al-Jafr Basin. *Neo-Lithics* 1/15: 23-33.

・Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (2015 accepted) Jabal Juhayra: First Two Excavation Seasons at A Stratified Neolithic settlement in the Jafr Basin, southern Jordan. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 59.

・Fujii, S. (2014) A half-buried cistern at Wadi Abu Tulayha: a key to tracing the pastoral nomadization in the Jafr Basin, southern Jordan. In: B. Finlayson, G. Rollefson, et al. (eds.), *Jordan's Prehistory: Past and Future Research*, pp. 159-167. Amman: The Department of Antiquities of Jordan.

・Fujii, S. (2013) Chronology of the Jafr prehistory and protohistory: A key to the process of pastoral nomadization in the southern Levant. *Syria* 90: 49-125.

・Hongo, H., Omar, L., Nasu, H., Krönneck, P., and Fujii, S. (2013) Faunal remains from Wadi Abu Tulayha: A PPNB outpost in the steppe-desert of southern Jordan. *Archaeozoology of the Near East X*: 1-25.

ホームページ等

日本西アジア考古学会英文HP:

[http://jswaa.org/en\\_expeditions/](http://jswaa.org/en_expeditions/)

金沢大学文化資源学研究センターHP:

<http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html>